「憎い」と「憎らしい」に関する考察

石黒利江子

キーワード　*「憎い」、「憎らしい」、感情形容詞、属性形容詞、形容詞の性質*

1．はじめに

本稿は、以下の例に示すように、類義関係にある形容詞「憎い」と「憎らしい」について考察する。

(1)[1]　目黒の歯科医強殺『優しい先生、犯人が憎い［憎らしい］』
（東京新聞2005/12/02）

(2)　配達員が「どうして刺したの」と聞けば、「憎らしかった［憎かった］。皆殺しにしたかった」。（東京新聞1998/08/18）

「憎い」も「憎らしい」も、人間の感情を表す「憎」を語基とする形容詞であるが、形式が異なるため、同一文脈で入れ換えが可能であっても違いがあるはずである。本稿は、先行研究を参考にし「憎い」と「憎らしい」の違いにおいて、それぞれが有する形容詞の性質に注目し、再考するものである。

2．先行研究

「憎い」と「憎らしい」に言及している先行研究は少ないが、西尾（1972）と寺村（1982）にみることができる。これらの先行研究において、「憎い」は感情形容詞、「憎らしい」は感情形容詞と属性形容詞の両方の性質を持った中間的な語であるとされている。[2]また、感情形容詞は、特定の感情主体を離れ、対象の一般的な性質を表現することもあるとされ、以下のような例が挙げられている。

(3)　肉親との別離はかなしい（西尾p. 34）
(4)　マムシハコワイ（寺村p. 150）

辞典類における意味記述としては、詳細な意味記述が飛田・浅田（1991）にある。[3]

「憎い」　憎悪の心理そのものの暗示。「いや」のような一時的な嫌悪を暗示せず、継続的であり（中略）「憎い」対象は、人間であることが多く、物事は擬人法をのぞいて対象にはなりにくい。
(5)　？息子を有罪にした法律が？憎い。
→息子を有罪にした法律が<u>恨めしい</u>。
「憎らしい」　「にくい」に似ているが（中略）「にくらしい」は憎悪を感じさせる対象の性質を暗示し、憎悪の程度そのものも「にくい」ほど高くない。

先行研究や辞典の意味記述をみてみると、おおよそ「憎い」は感情を表す感情形容詞、「憎らしい」が対象の状態を表す属性形容詞と感情形容詞の性質を有している形容詞と考えられる。本稿でも、先行研究の知見を踏襲するが、①両語が同じ感情形容詞として働く場合における両語の違い、②どのような対象が対象となるか、その対象に制限はあるか、という２つの問題点と、新たに両語が持つ反語的な用法においての考察も行う。反語的な用法については3. 3で詳しく述べる。

また、「感情形容詞」と「属性形容詞」の定義は、研究者により多少異なる。本稿では、「感情形容詞」を「感情主体の感情を表す形容詞」という意味で用い、「属性形容詞」を「対象の性質や状態を表す形容詞」という意味で用いる。

３．考察

3.1　感情形容詞「憎い」「憎らしい」

感情形容詞述語文では、主語は一人称に限られるという人称制限があるため、二人称、三人称が主語である(6b)は非文であり、(6a)が正しいことから、両語が感情形容詞の性質を有していることが分かる。

(6)a.　私は　太郎が　{憎い／憎らしい} です。

b. ＊　あなた／彼女 は太郎が　　{憎い／憎らしい} です。

次に対象についてみると、例(7)に示すように、対象が生物、無生物、事物や事象であっても不自然ではないため、人間以外でも対象になることが分かる。しかし、例(8)のように、対象が行為や態度である場合、「憎い」対象にはならない。

(7)　子供／野良犬／虫／スギ／体重計／法律／会社／戦争 が {憎い／憎らしい}。
(8)　嫌だといっても、(中略) 嫌なら他の者をやる、などという影村のいい方が憎らしかった ［＊憎かった］。(新田次郎『孤高の人』新潮文庫)

感情形容詞であっても、「彼の私を気遣う態度が嬉しかった」のように、対象の行為や態度を対象にとることもある。「憎い」も「嬉しい」同様に感情形容詞であるが、「憎い」はなぜ行為や態度は対象にならないのだろうか。

行為や態度は行為主体に帰するもので、実質行為主体が対象となる。対象となる行為は対象（行為主体）の一部と解釈ができ、「憎い」で表される憎悪は、対象の一部に留めておくことができず対象全体が「憎い」対象になってしまう程、憎悪の程度が大きい感情だと思われる。これは、例(8)の一部をかえた例(9a)が自然であるのに対し、例(9b)が容認できないことからも確認できる。

(9) a.　影村のいい方が憎らしかったが、影村自体は憎らしくない。
　b.　＊影村のいい方が憎かったが、影村自体は憎くない。

つまり、行為主体の行為のみを、行為主体とは別に感情の向かう先として対象にすることは、「憎い」においてはできないということである。

次に、感情の性質についてみてみる。次の例(10)(11)は「憎らしい」を「憎い」に置き換えられない例である。

(10)　「ただ、毎日のように計三百本もの水仙を植え替えしていかなければ、(中略) その苦労は並大抵ではありません。時には水仙を憎らしく［＊憎く］思うことさえあります」。　(中日新聞1995/01/03)
(11)　「あのころは要領が悪かったんで……。やりたくないことまでやらされ、おやじを憎らしい［＊憎い］と思うことは何度もあった」。
(東京新聞2000/03/28)

例(10)は、文脈に「時には～思うこともあった」とあるように、感情主体の対象に対する一時的な憎悪を表している。「憎い」に置き換えられないのは、先行研究にあるように、「憎い」が継続的な憎悪だからである。継続的な感情は、例(11)のように「何度も」生じることはない。このことから、「憎らしい」が表す憎悪は一時的で、「憎い」が表す憎悪は継続的であると考えられる。

一時的な憎悪か、継続的な憎悪かという点は、先述した憎悪の程度の大きさとも関わる。「憎い」は、憎悪の程度の大きな感情であると述べたが、程度が大きい故、すぐに消失するような感情ではなく継続的な感情となるといえる。一方の「憎らしい」は、一時的な憎悪であるため、「憎い」よりも憎悪の程度が小さいと考えられる。

3.2 属性形容詞「憎らしい」「憎い」

先行研究では、感情形容詞は特定の感情主体を離れ、対象の一般的な性質を表すこともあるとされていたが、これは「XはYが形容詞」という文の、Yを主題化した文において、感情形容詞が対象の性質を表す属性形容詞となるということである。次の３例は感情形容詞述語文における対象を主題化した例である。

(12) 子供／大人　は　{＊憎い／憎らしい}。
(13) 野良犬／スギ　は　{？憎い／憎らしい}。
(14) 犯人／戦争／裏切り　は　{　憎い／憎らしい}。

３例の容認度から、「憎い」は「憎らしい」ほど対象の一般的な性質を表すことができないと言える。「憎らしい」においては、感情形容詞としての「憎らしい」を用いて対象の性質を表していると解釈するより、「憎らしい」が属性形容詞として機能し、対象の性質を述べていると考える方が自然である。「憎らしい」が「憎い」より属性形容詞的であるというのは、次の例からも確認できる。

(15) (=(8)) 嫌だといっても、(中略) 嫌なら他の者をやる、などという影村のいい方が憎らしかった［＊憎かった］。
(新田次郎『孤高の人』新潮文庫)

(16) 息子は大切な存在で、(中略) 口答えやいたずらもするけれど、ちょっと憎らしい［＊憎い］くらいがいい。　(中日新聞2008/05/11)

例(15)「(影村の) いい方」、(16)「口答えやいたずら」は、人間の動的な行

為で変化を伴い、時間的な側面がある。先に「憎らしい」は一時的な感情を表すと述べたが、一時的な感情だけではなく対象の変化する動的な状態、一時的な現在の状態を説明することができると思われる。こうした一時的な状態について述べることができない「憎い」は、感情を表す性質を主とする形容詞であり、例(12)(13)(14)へと容認度が上がることを考えれば、話者の個人的な感情に左右されず万人の人が同一対象に同一の感情を抱くような対象の場合、属性形容詞として対象の性質を表すと考えられる。よって、「憎い」は、属性形容詞として働く場合には恒常的な対象の状態についてのみ述べることができると言える。

3.3　反語的な用法

まず、「憎い」と「憎らしい」が反語的に用いられる場合の意味記述を飛田・浅田（1991）で確認する。

「憎い」：プラスイメージの語。

(17)　わたしをとりこにしたにくいあの人。

(18)　「その荷物お持ちしましょう」「なかなかにくいこと言うじゃないか」

(19)　きんぴらとのりとベーコンの取り合わせがなんともニクい。(CM)

(17)はいとおしい、好きだという意味、(18)は感心だという意味、(19)はたいへんすばらしいという意味である。いずれも相手が憎く思えるほど好ましいという反語的な意味になっている。

（飛田・浅田 1991:423-424より抜粋引用、下線は引用者）

「憎らしい」：ややプラスイメージの語。

(20)　彼は本番にのぞんでにくらしいほど落ち着きはらっていた。

(21)　「はい、君の好きな秋桜の鉢」「まあ、にくらしい人ね」

(20)は憎しみをそそるほどすぐれているという意味である。(21)はおもに女性が好んで用いる用法で、いとしい、好きだという意味である。直接「いとしい、好きだ」というよりも反語的に用いているぶん、屈折していて深みのある表現になっている。

（飛田・浅田 1991:426-427より抜粋引用、下線は引用者）

飛田・浅田の記述から「憎い」と「憎らしい」がそれぞれ反語的に用いられる場合には、おおよそ「憎い」は「相手が憎く思えるほど好ましい」、「憎らしい」は「憎しみをそそるほどすぐれている」という意味を表していると考えら

れる。先行研究では、このような反語的に用いられる場合の意味と、感情の憎悪、属性の憎悪との関連性は示されていないため検討する。

(22) 還暦祝いに深紅のバラの花束。宅配便で届けるなんて憎い［＊憎らしい］演出。差出人は隣でニヤニヤ。一生忘れません。
（東京新聞2008/04/23）

「憎い」が用いられている例(22)では、夫の、花束を宅配便で届けた行為が、話者にとって想定外のプラスの出来事であったとプラス評価をしている。こういった文の場合、褒め（素晴らしいなど）の形式を用いてプラス評価をすることも可能であるが、本来は非常に強い憎悪を表すマイナスの「憎い」を用いることで、マイナスからプラスへの変化の程度が大きくなり、その分程度の大きいプラス評価となっていると思われる。次の例(23)は、「憎らしい」が用いられている例である。

(23) ラジオから流れる女性アナウンサーのよどみない声に背筋が寒くなるのを感じた。しばらく体調を崩していた自分の症状が、ぴったり当てはまったからだ。次第に曇っていく胸の内とは逆に、窓の外は憎らしい［＊憎い］ほど晴れ渡っていた。（中日新聞1999/01/19）

例(23)では、晴れ渡った天気にはプラス評価をしたいが、「次第に曇っていく胸の内」とあるように、話者の心境が不安などのマイナスの状態であるために、素直にプラス評価ができない表現となっている。

「憎い」が用いられている例(22)と「憎らしい」が用いられている例(23)には互換性はない。このことから、「憎い」は純粋で程度の大きいプラス評価のみを表し、「憎らしい」は素直にプラス評価ができない場合に用いると言える。また、「憎らしい」は次の例(24)のように、反語的な用法とも、憎悪を表しているとも、二通りの解釈が可能となる場合がある。

(24) 注目された体操男子の日中対決は、団体も個人総合も中国に軍配が上がった。中国のエース楊威の「日本に勝つのは難しくなかった」というコメントがちょっと憎らしかった。（東京新聞2006/12/16）

１つ目は反語的な用法としての解釈で、話者である日本人記者が、見事な勝利を収めた中国のエースに対しプラス評価をしたいが、負けた悔しさもあるた

め素直にプラス評価できないことを表している。２つ目の解釈は、話者が、日本が負けたという事実と見下されたかのようなコメントに対し憎悪を抱いているという解釈である。この二通りの解釈は、文脈と読み手の判断に委ねられるわけだが、「憎い」においてはこの解釈はできない。

反語的な用法についてまとめると、「憎い」は反語的な用法の意味が明らかで、「憎らしい」は二通りの解釈が可能である。これは両語が主として有する形容詞の性質にあると考えられる。「憎い」は非常に強い憎悪という感情を表すが故に、反語的な意味としては程度の大きいプラス評価となる。一方、「憎らしい」は対象の状態・性質を表すが主体の感情をも表すため、文脈から感情か属性かという判断をすることになる。「憎らしい」はこの点が反語的な用法においても影響しているため、二通りの解釈が可能であると考える。

４．まとめ

「憎い」は感情形容詞の性質を主とし、属性形容詞として振舞う場合は、万人の人が憎悪を感じる対象の恒常的な状態についてのみ用いることが可能である。「憎らしい」は属性形容詞の性質を主とするが、感情形容詞としても用いられる。

両語が感情形容詞として振舞う場合の違いは、「憎らしい」より「憎い」の方が感情主体の憎悪の程度が大きく、憎悪の程度に比例して、「憎い」は継続的な憎悪を、「憎らしい」は一時的な憎悪を表す点である。反語的な用法においては、「憎い」が純粋で程度の大きいプラス評価を、「憎らしい」が素直に受け入れられないプラス評価を表す。これらは、「憎い」「憎らしい」がそれぞれ主として有する性質の影響であると考える。

今後は、「憎い」「憎らしい」がそれぞれ有する性質の差が、それぞれの意味記述にどのように反映できるか、更に考察をすすめていきたい。

注

１　例文番号は、前節を通しての通し番号を用いる。

２　寺村(1982)では、「憎い」を「感情の直接的表出」(「話し手自身の、ある特定の対象に対する感情を直接に表出するタイプのもの」)、「憎らしい」を「感情的品定めの表現」(「感情をもとにした主観的な性状規定、判断のよ

うな性格のもの」とよんでいる。

3　他にも、現行の国語辞典『日本語国語大辞典第二版』、『学研国語大辞典第二版』、の意味記述、小学館辞典編集部編(1995)、森田(1989)、田・泉原・金(1998)を検討したが、おおよそ同様の意味記述である。

参考文献

金田一春彦・池田弥三郎（1988).『学研国語大辞典』（第二版）　学習研究社.
小学館編集部編(1995).『使い方の分かる類語例解辞典』小学館.
高橋太郎（1986).「形容詞のテンスについて」 宮地裕編『論集　日本語研究（一）現代編』　明治書院　pp.137-161.
寺村秀夫（1982).『日本語のシンタクスと意味Ｉ』くろしお出版.
田忠魁・泉原省二・金 相順編（1998).『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する　類義語使い分け辞典』　研究社.
西尾寅弥（1972).『形容詞の意味・用法の記述的研究』　国立国語研究所　秀英出版.
飛田良文・浅田秀子（1991).『現代形容詞用法辞典』　東京堂出版.
森田良行（1988).『日本語の類意表現』　創拓社.
森田良行（1989).『基礎日本語辞典』　角川書店.
渡辺実・北原保雄・松井栄一・林大・前田富祺（2000). 『日本国語大辞典』（第二版）　小学館.

例文出典

「中日新聞・東京新聞記事データベース」
『新潮文庫の100冊』CD-ROM版